

国際共同研究事業 令和 4(2022)年度実施報告書

令和 5 年 4 月 12 日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

鹿児島大学・法文学部

[職・氏名]

教授・尾崎孝宏

[課題番号]

JPJSJRP 20211705

1. プログラム名 英国との国際共同研究プログラム(JRP-LEAD with UKRI)

2. 研究課題名

(和文) ポストコロナの内陸アジア牧畜民社会に関する比較研究:モンゴルおよびキルギスの事例

(英文) Comparative research on pastoral societies in post-Covid19 Inner Asian countries: case study of
Mongolia and Kyrgyzstan

3. 共同研究実施期間

令和 3 年 12 月 1 日 ~ 令和 6 年 11 月 30 日 (3 年 0 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Oxford, Departmental Lecturer, Ariell Ahearn

5. 当該年度実施状況

- ・当該年度実施計画書の「当該年度実施計画の概要」の内容と対応させつつ、当該年度の実施状況を簡潔に記載してください。再委託又は共同実施を行った場合は、それぞれの実施状況がわかるように記載してください。
- ・当該年度又は前年度(複数年契約を締結し繰越を行った場合)の各費目における増減が研究経費総額の 50% (この額が 300 万円を超えない場合は 300 万円)に相当する額を超えた場合は、その理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。

本国際協働プログラムは 2021 年 12 月より開始した。2022 年度は本格的な調査活動の初年度として、1) 小チームによる牧畜地域を対象とした現地調査、2) 若手フィールド研究者向けサマースクール、3) ポスドク研究者の雇用と活用、4) インターネットを活用した調査データの蓄積・共有と外部への情報発信、5) 今年度の研究成果を公開するためのワークショップの実施、6) 国際会議(Oxford Interdisciplinary Desert Conference)における研究成果の紹介を行った。

1) 小チームによる牧畜地域を対象とした現地調査:2022 年夏季及び秋季に、モンゴル国トウブ県(中部)、同ボルガン県(北部)、同オブス県(西部)、同バヤンホンゴル県(南部)において小チーム形式の現地調査を実施した。当初の予定通り、調査対象は牧畜地域の住民、現地政府、NGO 組織等であり、主として日本側の若手研究者が準備した質問内容に即しつつ、現地で発見した問題点もカバーしたインタビュー調査を行った。

2) 若手フィールド研究者向けサマースクール:2022 年 8 月下旬に、英国側との共催によりモンゴル国のモンゴル国立大学で若手フィールド研究者向けに 4 日間のサマースクールを行い、オンライン参加も含めて約 50 名が参加した。当日の講義資料はモンゴル語化され、モンゴル国立大学考古学・文化人類学教室でテキストとして活用されている。

3) ポスドク研究者の雇用と活用:2022 年 4 月より、日本側で若手研究者の育成を目的としてポスドク研究者を、鹿児島大学法文学部特任研究員(任期 2 年)として雇用した。本特任研究員は研究に従事するだけでなく、事務局機能も担うことで本共同研究の円滑な遂行に貢献している。

4) インターネットを活用した調査データの蓄積・共有と外部への情報発信:英国側がオックスフォード大学のシステム上にデータ共有用ディスクスペース(Office365 ベース)を確保し、共同研究の運営に必要なデータや調査データ等を蓄積し、プロジェクトメンバー間で共有している。また本年度はオックスフォード大学のサーバ上に本プロジェクト(PPIA)のウェブサイト(<https://www.ppia.ouce.ox.ac.uk/>)も立ち上げ、ページに Google ウェブサイト翻訳ツールを埋め込むことで日本語、モンゴル語、キルギス語でも表示できるようにした。

5) 今年度の研究成果を公開するためのワークショップの実施:2023 年 2 月に神戸大学でハイブリッド型のワークショップ「現代モンゴルにおける都市＝草原関係の変容とウェルビーイング」を実施し、英国側メンバー 1 名(対面参加)の基調講演および、日本側メンバー 4 名の個別報告がなされた。

6) 国際会議における研究成果の紹介:2023 年 3 月にオックスフォード大学で行われた国際会議 Oxford Interdisciplinary Desert Conference に日本側メンバー 7 名が参加し、研究成果の紹介を実施した。本国際会議は英国側メンバー 2 名が所属する School of Geography and the Environment が主催し、50 タイトル以上の口頭発表が行われたが、日本側メンバーはパネル「Mongolia: During and Post-Pandemic」「Milk and Meat in Pastoralist Societies」に分かれて発表を行った。

7. して本事業による支援を受けたことを明示して発表したものについて記載してください)

[雑誌論文] 計(0)件 うち査読付論文 計(0)件

通番	共著の有無*1	著者名、論文標題等*2
1		
2		
3		

[学会発表]計(13)件 うち招待講演 計(4)件

通番	共著の有無*1	発表者名、発表標題等*2
1		Takahiro Ozaki “Post COVID-19 pastoral society as a resilience from social disaster” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
2		Akira Kimamura “Hybridity and Vitality of Culture: Mongolian Traditional Performing Arts during the Covid-19 pandemic” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
3		Chieko Hirota “Handicraft techniques inherited by the Kazakh people and their characteristics - a case study of Bayan-Ulgii Province, Mongolia” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
4		Yuki Morinaga “Changes in the traditional nomadic drink “airag (fermented horse milk) in Mongolia” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
5		Takahiro Tomita “Reconstruction of pastoral management and local milk supply in suburban areas” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
6		Moe Terao “Beliefs in Meat and Milk: A Study on the Relationship between the Wellness Philosophy and Traditional Foods in Mongolia during the Pandemic” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
7		Yuko Matsumiya “Exodus from overcrowded cities: Creating dual habitation in Ulaanbaatar during Covid” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
8		Batbuyan Batjav and Akira Kamimura “Impact of the Covid-19 Pandemic on Mobile Pastoralism in Mongolia” 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference, 2023, United Kingdom
9		松宮 邑子「都市生活における“幸福”の体現——草原との関係にみる都市民の住まう実践」ワークショップ「現代モンゴルにおける都市＝草原関係の変容とウェルビーイング」、2023年、神戸(招待講演)

10		富田敬大「都市近郊の零細酪農生産の特徴と持続可能性」ワークショップ「現代モンゴルにおける都市＝草原関係の変容とウェルビーイング」、2023年、神戸(招待講演)
11		星野弘方「新型コロナウイルス・パンデミックの中のモンゴルの遊牧民——モンゴル国全国気象ネットワークを用いた調査から見えたもの」ワークショップ「現代モンゴルにおける都市＝草原関係の変容とウェルビーイング」、2023年、神戸(招待講演)
12		上村明「新型コロナウイルス・パンデミックはモンゴル国の移動牧畜を変えたか」ワークショップ「現代モンゴルにおける都市＝草原関係の変容とウェルビーイング」、2023年、神戸(招待講演)
13		上村明「新型コロナウイルス感染症のモンゴル国の移動牧畜への影響を考える」日本モンゴル学会2022年秋季大会、2022年、鹿児島

〔図書〕計(0)件

通番	共著の有無*1	著者名、著書名等*2
1		

*1 相手国側参加者との共著(共同発表)がある場合は○と記入。

*2 当該発表等を同定するに十分な情報を記載すること。例えば学術論文の場合は、著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年(西暦)、最初と最後の頁、掲載論文の DOI、学会発表の場合は発表者名、発表標題、学会等名、発表年(西暦)、発表地(国名、国外開催の場合のみ)、図書の場合は著者名、著書名、出版社名、発行年(西暦)、総ページ数、ISBN、など(順番は入れ替わってもよい)。相手国側参加者との共著となる場合は、著者名が複数であっても省略せず、その氏名を記入し下線を付すこと。

*3 足りない場合は適宜行を追加すること。

8. 本事業による産業財産権の出願・取得状況(当該年度に出願又は取得したもの)

〔出願〕 計(0)件

通番	産業財産権の名称、発明者、権利者、産業財産権の種類、番号、出願年、国内・外国の別
1	

〔取得〕 計(0)件

通番	産業財産権の名称、発明者、権利者、産業財産権の種類、番号、取得年、国内・外国の別
2	

* 必要に応じて、欄を追加してください。